

&lt;研究論文&gt;

## 学生アスリート向けインターンシッププログラムの学習効果

中沢 正江<sup>1</sup>・松尾 智晶<sup>1</sup>・松本 翔伍<sup>2</sup>

学生アスリートに関して国内でも大学における修学の支援及び将来に向けたキャリア形成支援についての関心が高まっている。本稿における学生アスリートとは、体育会系学生等と呼ばれ、大学に在籍している学部生の内、運動系の部活動（以下、「アスリート活動」）に所属している者を言う。アスリート活動は、しばしば卒業後にプロ選手として活躍する範囲を含む活動を指しており、その練習時間は相当量に上る。更に、アスリート活動を優先した大学生活や、高校までのアスリート活動を優先した基礎学力の不足により、大学における修学への意欲が維持できないこともある。このような状況下で、一般的に、アスリート活動と学業との両立は困難になりがちである。

本研究では、この課題への取り組みとして京都産業大学で2018年に試験的に導入された「アスリートインターンシップ」プログラムの学習成果について、2名のプログラム修了者のインタビューデータを質的に分析し、その学習成果の構成要素を仮説として抽出した。その後、抽出した構成要素が調査協力に応じた全8名の修了生に共通してみられるかについて、量的に分析した。本稿は、この成果について報告する。

キーワード: 学生アスリート、学生アスリート向けインターンシップ、ライフスキル、学習成果

### 1. はじめに

大学において運動部系の部活動（以下、「アスリート活動」と言う）を行う学生（以下、「学生アスリート」と言う）達が存在する。

一般に、学生アスリートがプロアスリートとして卒業後に活躍できるケースは限定的であり、その多くは一般学生と同様に企業等に就職してキャリアを形成している。このような学生アスリートにとっては、社会で自らキャリアを形成していく力を在学中に身に付けることが重要である。また、プロアスリートになったとしても、現役で活躍できる期間は限られている。このような学生アスリートにとっても、セカンドキャリアへの準備を大学在籍中に行っておくことが重要である。たとえば、米国におけるアメリカンフットボールでは、大学からプロ選手となるケースが1.6%、更に、狭き門を経てプロ選手になったとしても、現役で活躍できる期間は平均2,3年と言われており、大変が引退後に生きて行く術を身に付ける必要があると言われている（吉田 2015）。

米国においては、上述の認識が広く共有されており、健全なプロスポーツ領域の発展の下支えとしても、社会で活躍する構成員の輩出という意味

でも、大学在籍中にライフスキル（自立して生きる力）の育成を中心とした教育プログラムの実践が行われている。吉田（2013）は、このような米国の取り組みを具体的に紹介し、国内の学生アスリートを取り巻く状況について、警鐘を鳴らしている。

国内では、2017年3月に公表された「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ～大学スポーツの価値の向上に向けて～」(文部科学省 2017) の中で、「5. 学生アスリートのデュアルキャリア支援」という項目において、次のような記述がなされている。「学生アスリートにとって大学時代は競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図るうえでも重要な時期と言える。そのため、大学は学生が学業を修めスポーツでも活躍するための修学上の配慮をすると同時に、将来に向けたキャリア形成支援を行って社会に送り出すことが重要である。」(下線は筆者)という記述がなされ、認識が共有され始めたところである。

京都産業大学においても、多くの学生アスリートが、将来に向けたキャリア形成、社会で必要なスキル、人間形成が充分でないまま、就職活動を

<sup>1</sup> 京都産業大学 共通教育推進機構、<sup>2</sup> 京都産業大学 キャリア教育センター

経て一般就職という進路を選択しているケースがみられた。この現状を受け、京都産業大学では2018年度から試行的に「アスリートインターンシップ」という学習プログラムを、科目化の下準備として実施するに至った。

「アスリートインターンシップ」は、共通教育推進機構（キャリア教育担当）が、2018年度より体育会クラブに加盟する2・3年次生を対象に、後の科目化を目指して試行的に実施したキャリア形成支援教育プログラム（秋学期集中）である。本プログラムの長は、受講生を学生アスリートに特化していること、全学部横断で実施していること、という2つの要素を兼ね備えていることにある。

2018年度は、試行的に実施したことから、全体育会クラブのうち、空手道部・硬式野球部・サッカー部・バスケットボール部（男子）・ラグビー部・陸上競技部（長距離）の6クラブへ依頼し、バスケットボール部（男子）・ラグビー部を除く4クラブから9名の学生が参加した。

本研究では、全国に先駆けて行われたこのプログラムの主な学習効果を、プログラムに参加した学生アスリートへのインタビューデータを質的・量的に分析することによって明らかにする。

より具体的には、続く2.にて研究目的と研究方法、インタビュー調査の実施時期と方法について述べる。3.では、研究対象である当該プログラム実施の経緯と、本プログラムの概要を述べる。4.では、2.に基づいて得られたインタビューデータの概要と分析結果について述べる。5.では、本研究を総括し、今後の展望を述べる。

## 2. 目的と手法

本章では、本研究の目的と手法、及び本研究の中心となるインタビュー調査とその分析手法について述べる。

### 2.1. 目的

本研究は、2018年度に試行的学習プログラム（内容は3.にて詳述）として実施された「アスリートインターンシップ」プログラムの学習成果に関する構成要素を明らかにすることを目的としている。

### 2.2. 手法

本研究では、研究の初期段階で、質的研究による概念抽出を行っている。初期に量的な方法を用いなかった理由は、主な学習成果の構成要素がどのようなものであるかについての仮説生成段階で

あった事が挙げられる。このような段階に、質的な分析は効果的であるからである（フリック2002）。

このような質的手法を用いて当該学習プログラムの学習成果の構成要素をコードと概念（コードのまとめり・カテゴリ）として抽出した後、全8件のインタビューデータについて、当該コード・概念の出現回数をカウントし、一覧とした。これは前述の学習成果の構成要素として見出したコード・概念が、他の事例にも共通して見られるのか、見られるとしてどの範囲で見られるのかを明らかにするためにいった。本研究の対象者が、全て網羅したとしても9名であることから、統計的な検討は適当でなく、この手法が抽出した学習成果に関するコードと概念の適用範囲と改善を検討する妥当な方法であると考えられる。

より具体的な手順は次の通りである。まず、質的なパートとして、①プログラム受講生への半構造化のインタビュー調査、②インタビューの逐語記録（インタビューデータ）の作成、③受講生2名分のデータについて分析者3名で生成的コード化（予めコードを定めずにコードを探索的に付す方法）によるコードの開発、④③のコードとインタビューデータから学習成果に関するカテゴリ（概念）の開発である。次に、量的なパートとして⑤③④で開発したコード及び概念について、③④で参照した2名分以外の6名分についても合わせて検討し、出現回数のカウントを行った。

インタビューは、本件と同様のインタビュー調査からの概念抽出を複数回行っている1名と、キャリアカウンセリング等の熟練者で、倫理的配慮に基づく実施が可能な1名が、全9名の受講生のうち、インタビューに対応可能な8名を分担して実施した。なお、実施の際には、当該受講生の所属部活動とプログラム受講中の振る舞いについて知識のあるプログラム運営担当職員1名が同席し、インタビュー中に事実関係について調査者と対象者の間で認識に齟齬が発生した場合の補足情報を得られる環境を整えた。

### 2.3. インタビュー調査

実施時期は、2019年5月9日～5月17日である。一件に関する所要時間は、30分程度とし、最大45分とした。予め準備した質問は以下の通りである。

- ① 講義と実習を通して、（以下の②③の質問では、ここまで同様であるので省略する）最も自分の成長につながったと思うことは何か
- ② 自分の役割についての考えに、どのような変

化があったか

- ③ 課題を見つけたり、課題に直面した場面はあったか。あった場合、どのような課題で、どのように対応したか
- ④ 自分の卒業後のイメージはどのようなものか
- ⑤ この科目の良かった点と改善を望む点はどのようなものか

インタビューの実施は、対象者の語りの内容によって、質問の順序を変更し、研究目的を達成する範囲で適宜、必要な質問を加えて行った。

### 3. 「アスリートインターンシップ」概要

本章では、研究対象である「アスリートインターンシップ」プログラムについて、実施の経緯と概要を述べる。

#### 3.1. 試行的プログラム実施の経緯

当該プログラムを開講した背景には、京都産業大学において、①学生アスリートは、アスリート活動を大学生活の中心に据える傾向があり、過去のデータを参照すると、4年間クラブ活動に励んだ後、低単位等を理由に退学するケースも見られること、②海外国内の他の事例と同様に、学生アスリートのうち、大学卒業後に競技成績が評価され、実業団等へ就職できる学生は僅かであり、大半の学生は一般学生と同様に企業等へ就職するため、学生時代から将来を見据えたキャリア形成支援が必要であること、の2点を課題として、キャリア教育センターの教職員間で合意していたことが挙げられる。つまり、当該プログラムを提供することが、1つの解決策になりうるだろうという認識から、開講に至っている。

#### 3.2. プログラムの構成と運営体制

##### 3.2.1. プログラムの構成

2018年度は、対象となる6つの体育会クラブのうち、4クラブから、3年次生5名・2年次生4名の合計9名が受講し、1クラスで運営を行った。プログラムは、「実習期間」2月12～15日（火～金）実質3日間、「事前学習」12月22日（土）・1月12日（土）1・2限、「事後学習」2月16日（土）1・2限の合計6コマを前後に組み込んだ内容となっており、秋学期（12月～2月）を利用して実施した。

当該プログラムの目的は、①学生アスリートは、クラブ活動に集中するあまり、就職活動への出遅れや自身のキャリア感を持たないまま進路選択を行っている学生が多い。この取組みを通して、キャ

リア感を醸成し、自身で進路選択ができる力を養う。②実社会において就業体験を行い学業の大切さに気付かせることで、残りの学生生活における学修意欲の向上に努める。③実社会において身に付けた力を、加盟するクラブにおいて活かすことで、クラブの中核を担える人材を育成する。の3つとした。当該プログラムの具体的な授業内容は、表1の通りである。

以上の内容は、京都産業大学が1990年代後半から、国内で先駆けて取り組んできた、「インターンシップ3」という正課科目（共通教育）で蓄積してきたプログラムを踏襲して開発された。

##### 3.2.2. 運営体制

2018年度の当該プログラムは、主担当教員1名とプログラム設計も含めた科目事務全般、企業開拓・調整、企業と学生とのマッチングを担当したキャリア教育センター職員2名の合計3名で運営した。なお、当該プログラムの企画時の議論及び効果検証に協力した教員2名がおり、本稿はその教員2名と担当職員1名の3名で執筆した。

## 4. 分析結果

本章では、2で述べたインタビュー調査によって得られたデータの概要と、学習成果に関するコード及び概念について述べる。

表1. アスリートインターンシップの授業内容

コマ	内容	各回の到達目標
1	自己理解・自己PR	・クラスメンバーを知る。 ・「実習先の職場での挨拶」を想定した自己紹介、自己PRができる。
2	実習先企業研究	・実習先の特徴を理解するためにどのような観点が必要か理解する。 ・実習先について、初めて聞く人に理解してもらえる説明ができる。
3	目標設定・実行計画策定	・インターンシップの「目標」の意味を整理、理解し、言語化することによって自分の中に落とし込む。 ・インターンシップの「目標」を達成するために、具体的に何をするのか、検討して実効性のある計画を立案する。

4	目標達成宣言・オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の「インターンシップ実行計画」を発表する。</li> <li>・受講者の発表内容を評価・検証し、率直にコメントする。</li> <li>・受講者のプランの良いところを必要に応じて自分の計画に反映する。</li> </ul>
各実習先でのインターンシップ		
5	活動報告・成長と今後の学びに向けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターンシップ等を振り返り、「目標」をどの程度達成できたのか、課題は何なのかを確認・理解する。</li> <li>・インターンシップ前後で「どう変わったか?」、「今後はどう活かして行くか?」を確認、理解し、自らの「経験」に落とし込む。</li> </ul>
6	成果報告	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前・事後を含めたインターンシップの成果について個別報告（発表）し、クラスで共有する。</li> <li>・事前・事後を含めたインターンシップ経験を言語化することにより、「体験」を「経験」に落とし込む。</li> </ul>

#### 4.1. インタビューデータと取り扱い

全8名分のデータは、専門業者に依頼し文字起こしを行ったもので、スペースや改行を除き62,444文字となった。このデータについて、インタビューを実施した3名で、全8件を一読した上で協議し、発話内容の明瞭さを基準に2件を選定し、これを同3名で質的に分析した。これにより、4.2に述べる学習成果に係るコード及び概念を得た。この際、抽出したコード及び概念の質を担保するために、能智（2005）を参照し質的研究の質の高め方に関する確認を行った。

その後、他の6件についても合わせてコード及び概念の出現回数をカウントし、一覧とした。この際、先の2件では出現しなかった種類の発言が見られ、コード化の必要があれば、コードとして追加した。

#### 4.2. コードと概念

前述の2件のインタビューデータから抽出したコード及び概念は表2の通りである。先に述べた2件のデータでは得られず、他6件の分析中に追加したコードはI5の「別クラブメンバーとの意見

交換」、I6の「そこで働く人々をみる経験の獲得」、L3の「実習体験の言語化・議論」の3つである（表中ではコード末尾に「※」を付して示した）。表2の最も左の列が概念（コードのまとめ）であり、表2の左から2番目の列がコード記号（各コードに便宜上の記号を振ったもの）、3番目の列が得られたコード、右から2番目の列が当該コードを割り当てたデータの個数、最も右の列が当該コードについて発言した受講生の人数である（データは8件であるので、最大値は8となる）。各コードは、分析者3名がそれぞれに割当を行い、擦り合わせを行った。

結果として、インタビューデータの質的分析を通じ、学習成果として得られたコードは25であり、概念数は6である。なお、R1～R3の「プログラム改善要望」は学習成果に関する発言ではないが、今後のプログラム改善に資するデータとして参考として併せて掲載している。

なお、C3の「(ある)職種への興味感心の認識・深化(+/-)」は、就業体験及び事前事後学習によって得られた特定の職種への興味関心や自身の事前の興味関心と現時点での興味関心との比較について、ポジティブな発話（例：興味関心が増した）、ネガティブな発話（例：興味関心を持っていない事が分かった）の両方を含んでいる事から、末尾に(+/-)と付している。

#### 4.3. 分析結果

##### 4.3.1. 予め期待されていた成果に関する分析

3.で述べたように、当該プログラムの目的は、①取組みを通して、学生アスリートにキャリア感を醸成し、自身で進路選択ができる力を養うこと、②実社会における就業体験を通じて学業の大切さに気付かせ、残りの学生生活における学習意欲の向上に努めること、③実社会において身に付けた力を、加盟するクラブにおいて活かすことで、クラブの中核を担える人材を育成すること、の3つであった。これを到達目標の形で言い換えるならば、①自身で進路選択ができる力を身に付ける、②就業体験から大学における学習の意義に気づき、学習意欲を向上する、③就業体験において必要な力を身に付け、クラブ活動に活かすことができる、の3つである。これを更に構成要素に分けて箇条書きすると以下のリストが得られる。

- a) 自身で進路選択ができる（到達目標①）
- b) 就業体験と大学における学習の意義に気づく（到達目標②）
- c) 大学における学習に意欲を持っている（到達目標②）

表2. コード及び概念とその出現回数・出現範囲

概念	コード 記号	コード	出現 回数	出現 範囲
学生アスリート特性	A1	学生アスリートであることによる行動制限の認識	6	2
	A2	(一般的なスキル修得から)「逃げていた」自分の認識	3	1
実習活動の重要性	I1	強制的な一般的なスキルの学習機会の獲得	3	1
	I2	社会人からの自身の評価	8	2
	I3	不足しているスキルに関する具体的な知識の習得	9	4
	I4	実践の困難さの認識	5	3
	I5	別クラブメンバーとの意見交換 ※	6	2
	I6	そこで働く人々の様子をみる経験の獲得 ※	7	3
事前・事後学習の 重要性	L1	実習に対する独自の目標設定	4	1
	L2	事前授業における準備の重要性	3	2
	L3	実習体験の言語化・議論 ※	5	1
自己評価の深化	S1	これまでの自身の行動特性・価値観の(再)認識	48	8
	S2	自身に不足しているスキル・知識の認識	36	7
	S3	自身の可能性の認識	9	5
	S4	自信の獲得	14	6
キャリア形成 イメージの獲得	C1	「働く」イメージの獲得	31	8
	C2	(ある)職種イメージの獲得	27	8
	C3	(ある)職種への興味感心の認識・深化(+/-)	19	6
行動変容	B1	これまでの自身の行動特性の改善	12	5
	B2	獲得知識の就職活動への活用	5	2
	B3	獲得知識の部活動への活用	9	5
	B4	獲得知識の正課活動への活用	4	2
	B5	キャリア形成のための具体的な行動の開始	7	3
	B6	部活動の再評価	6	4
	B7	部活動メンバーの再評価	3	1
(プログラム 改善要望)	R1	(実習期間の長さ)	4	1
	R2	(学べなかった内容例)	5	2
	R3	(より実践的な「働く」経験への要望)	4	2

- d) 就業上必要な力を身に付ける (到達目標③)
- e) d) をクラブ活動に活かすことができる (到達目標③)

この当該プログラムの目的から得られたリストに基づき、実際にプログラムを受講した学習者からのインタビューデータから得られたコード及び概念と照らし合わせて分析すると、以下の通りで

ある。

a) について、まず、「自己評価の深化」及び「キャリア形成イメージの獲得」に受講生の発言は集中しており、進路選択に必要な自己の能力や行動特性への評価・再評価が行われ、今後のキャリア形成への具体的なイメージが得られていると言える。これは、進路選択への準備に資するもので

ある。更に、自身の「行動変容」についても多くの受講生の発言が得られており、「キャリア形成への具体的な行動の開始 (B5)」について3名の受講生が言及している。加えて、「これまでの自身の行動特性の改善 (B1)」にも5名から言及されており、a) についての学習成果が得られているといえる。

b) については、当該プログラム (実習を含む) を通じて得られた知識の正課活動への活用についての言及は得られているものの、2名の4度に渡る発言に留まっており、ポジティブな効果は期待できるものの、他の受講生にとっては、正課活動と実習活動との関係性を認識するに至らなかったと考えられる。これに伴い、c) はb) を前提としているため、十分な学習成果を得るためには、当該プログラムを改善する必要があるだろう。

d) については、「不足しているスキル・知識の認識 (S2)」に関して8名中7名から、計36回に及ぶ発言が見られており、少なくとも就業上必要な力について「認識する」という部分までは学習成果として得られているようである。e) は、d) を前提とした項目であるものの、当該プログラムで「獲得 (した) 知識を部活動への活用」する旨の発言が、5名から得られていることから、当該プログラムの学習成果を部活動に活かすことについては、多くの受講生が意識している状況に至っている。

これらをまとめると、自身の進路選択、自身の社会適応スキルの向上に関しては最も受講生の発言が集中している部分であり、学習成果として確認できる。一方、実社会での活動と大学における正課活動との関連に注意を向けることに関しては課題がある。当該プログラムで得られた学びの部活動への転用については受講生の意識が向いている。

当該プログラムが事前に期待していた学習効果については以上である。次に、当該プログラムが事前に期待していた学習効果とは別に、受講生が当該プログラムから得たものについて検討する。

#### 4.3.2. 抽出された概念について

研究の成果としてインタビューデータから抽出された概念について、表2の順に従って概要を述べる。

##### ① 学生アスリート特性

「学生アスリートであることによる行動制限の認識 (A1)」は、学生アスリートである自分がインターンシップに参加できると思っていなかったという主旨の発言である。「(一般的なスキル修得から)『逃げていた』自分の

認識 (A2)」は、プレゼンテーション等の一般的なスキルを試される場から自分が逃げていたということについて振り返る発言である。A1とA2はそれぞれ2名、1名から発言を抽出している旨、表2にも示したが、内1名は同一人物である。即ち、この「学生アスリート特性」について言及したものは8名中2名のみであった。しかし、学生アスリートの立場について直接的に表現された部分であり、分析者3名共に重要な発言であると判断していた部分でもあった。

ここでは、練習時間や試合日程といったアスリート活動に忙殺され、一般学生のような就職活動はできないだろう、一般学生と一般的なスキルで勝負しても勝てないだろう、と考えがちな学生アスリートの姿をみることができる。

このような発言から、大学におけるアスリート活動が、吉田 (2013) のいう「自分にはスポーツのことしかわからない」という人々 (プロ選手になったとしても引退後に不安を抱える人々) を産み出しかねない状況にあるという実状に、まさに今、我々は直面していると理解することができる。

##### ② 実習活動の重要性

実習活動の具体的な内容についての発言に基づき抽出した。これらの発言は、プログラム終了後も受講生にとって効果を齎している部分だと考えられる。また、コード名はそのまま、具体的に実習活動の中でどのような学習活動が実施されたか、という意味である。I1～I4、I6のプログラム上、意図されていた成果とは別に、同一の実習先で別クラブメンバーとの意見交換を行った事が成果として語られている (I5) ことは、特筆すべき点である。

##### ③ 事前/事後学習の重要性

②と同様に、事前事後学習の具体的な内容についての発言に基づき抽出した。構成要素であるL1、L2、L3は、それぞれ1名、2名から発言が得られたことを表2に記述している。発言者には重複があり、本概念に該当する発言を行ったものは計4名であった。事前学習における独自の目標設定はコンテンツそのものであるし、事前学習において、実習に必要な知識を修得するのも同様である。まずは意図した事前学習のコンテンツが想定した機能のある程度果たしているという点を確認できる。しかし、ここで特筆すべきは、L3の

実習体験の言語化と議論で、異なる実習先、異なるクラブに所属する受講生と、自身の実習内容や当該プログラム全体で学んだことを比較し、相対化していること、その機会があったことを喜んでいことが確認されたことである。

#### ④ 自己評価の深化

自己評価の深化については、4.3.1で既に触れた為に重複して解説はしない。学生アスリートに対し、進路選択の起点となる「自分」についての評価を深める内容になっている。

#### ⑤ キャリア形成イメージの獲得

これについても、④と同様に4.3.1で既に触れたため、重複して解説はしない。④と並び発言回数の多く見られた概念であり、④と同様に多くの受講生が言及しており、当該プログラムの主要な学習成果であると言える。

#### ⑥ 行動変容

これについても4.3.1で既に触れている。B1、B5が割り当てられた発言は自身の進路選択、キャリア形成への活動が当該プログラムをきっかけとして開始されていることを確認できる部分である。B2～B4は、それぞれ当該プログラム（事前事後学習+実習）で得た知識・スキルを就職活動、部活動、成果活動に活かしていることに関する発言である。B6、B7は、当該プログラム以後、部活動への関わり方が（新たな視点を入れる事で）変わったという発言であった。

## 5. まとめ

本稿では、国内でも関心が高まりつつある学生アスリートに対する修学支援、キャリア形成支援の取り組みとして、正課科目化を目指し、2018年度に試行的に実施された学生アスリート向けインターンシッププログラムについての学習成果を明らかにしたものである。

全受講生9名の内、インタビュー可能であった8名にインタビュー調査を実施し、そのデータを分析者3名で質的に分析した。特に発言内容が明瞭であった2名分のデータに着目し、探索的コード化と概念抽出を行い、その後、抽出したコードと概念を用いて全8名分のデータについて、コード該当箇所をカウントした。更に、この作業時点で新たに設定する必要があったコードを追加した。これらの手順によって、得られたのが表2である。

当該プログラムの主な学習成果は、表2にある

ように「自己評価の深化」と「キャリア形成イメージの獲得」である。更に、これらの学習成果は「行動変容」にまで繋がっており、当該プログラムは進路選択に対する次の一步に繋がる取り組みになっていると言える。

一方で、プログラムの目的として設定していた「大学における学び」と、実社会での実習経験との繋がりについての受講生の発言は充分得ることができず、今後のプログラムにおいて更なる改善が望まれる。

他に、受講生からの改善要望として、実習期間が短すぎる（R1）、実習内容において期待していた内容が得られなかったこと（R2）（例えば、実際にある職種において自分がどのような振る舞いをするのかを把握してみたかった等）、実習内容により実務的な内容を含めて欲しいこと（R3）、が得られている。R1～R3の要望は、いずれも、より実践的・実務的・本格的な『働く』環境に自分を投じ、実際に自分が『働いてみてどうなのか』という部分を把握したいという一連の要望としてみることもできる。学生アスリート達のスケジュール上の課題もあるが、この点の改善についても、検討の余地があるかもしれない。

当該プログラムは、6コマの事前事後授業と3日間の実習期間という短い、小さな学習プログラムである。にも関わらず、その受講生全員から自己評価の深化、キャリア形成イメージの獲得について、実に沢山の発言を得ることができた。つまり、受講生は自ら進んで、その経験についてよく語った。具体的な行動変容に繋がった事例も少なくなかった。小さな取り組みにしては大きな学習成果を得ている状況であると言ってよいだろう。

表2の「学生アスリート特性」にみるように、学生アスリート達が「通常の就職活動はできないだろう」と思い込んでいる側面がある。このようなケースでは、自己理解を深めたり、キャリア形成イメージを具体化したりする、所謂「通常の就職活動」の学習機会を、特に意識せず、知らぬ間に退けてしまっている可能性があるだろう。

当該プログラムは、小さな取り組みにも関わらず、知らぬ間に「まずはアスリート活動」と、その後のキャリア形成や大学における学びから、学生を遠ざけてしまっている状況を打開することに成功している。

今後、上記に述べた改善点を改善し、大学における学び（正課活動）との繋がりが、学生アスリートにより強く認識される状況に至ることが望まれる。そうなったとき、我々は、知らぬ間に学生アスリート達を大学における学びから遠ざけてお

り、自立した社会人として生きる支援ができていないという現状から、学生アスリート達と共に抜け出すことができるだろう。

### 謝辞

本研究にご協力下さった、京都産業大学の学生アスリートの皆様に厚く感謝申し上げます。また、「アスリートインターンシップ」の企画及び運営について共に議論して下さった学長室仲村啓吾氏に心より感謝申し上げます。

### 参考文献

- 文部科学省 (2017) 大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ～大学スポーツの価値の向上に向けて～。  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/005\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf) (参照 2019.11.28)
- 能智正博 (2005) 質的研究の質と評価基準について. 東京女子大学心理学紀要: pp.87-97
- ウヴェ・フリック (2002) 質的研究入門: 「人間の科学」のための方法論. 小田ほか訳. 春秋社
- 吉田良治 (2013) ライフスキル・フィットネス—自立の為のスポーツ教育—. 岩波書店
- 吉田良治 (2015) スポーツマネジメント論—アメリカのスポーツビジネスに学ぶ—. 昭和堂, 京都

As a result, the main learning outcomes of the program were “deepening self-assessment” and “imaging her/his own career acquisition”.

This paper outlines the student-athlete internship program and describes the procedure and results of this research.

KEYWORDS: Student athlete, Internship, Life skills, Learning outcomes

---

2020年2月26日受理

1 Institute of General Education, Kyoto Sangyo University

2 Cooperative Education Center, Kyoto Sangyo University

---

## Learning Outcomes of the Student-Athlete Internship Program

---

Masae NAKAZAWA<sup>1</sup>, Chiaki MATSUO<sup>1</sup>,  
Shogo MATSUMOTO<sup>2</sup>

In Japan, most student athletes currently build their campus life around athletic activities. In this situation, it is difficult for student athletes to balance learning activities and athletic activities.

Kyoto Sangyo University (KSU) conducted a student-athlete internship program (trial version) to solve this problem in 2018.

In this study, a qualitative analysis was conducted based on interview data on the learning outcomes of the “Student-Athlete Internship” Program at KSU.